

説教 『神の指』 山本 護牧師
聖書 詩編 8:4~5 / ルカによる福音書 11:14~23

イエスの悪霊払いを見た群衆は驚嘆するが(ルカ 11:14)、悪霊の親玉ベルゼブルの力だと非難する者もいた(11:15)。加えて、態度こそ謙っているが一つ試してやれ、という底意ある者もいた(11:16)。イエスは彼らに譬えで応答するが(11:17,21~22)、悪意の者らが言い負かされた感じはない。また語られた譬えが分かりづらいせいも群衆の反応も鈍い。興奮気味に讚美している女がいるけれども、これは半ば勘違いだ(11:27~28)。この場面は重々しいけれども、いつもの鮮やかな斬り返しが見られない。

こういう渋い箇所は、用事を放り出してじっくり味わいたい。「悪霊」とは何か。いろいろある霊の中でも、神の息吹が「①聖霊」なら、自然や生活圏に宿っているのが「②精霊」で、人間に危害を及ぼすのが「③悪霊」なのだろうか。聖書は②をほとんど取り上げない。パウロは「わたしたちは世の霊ではなく、神からの霊を受けた(1コリント 2:12)」と言及しているが無関心のようだ。しかし悪霊は、神とのつながりをあの手この手で壊そうとするから、キリスト者には不安な関心事であろう。

悪霊とは、次のような作用を擬人化したものと言えるのではないか。不治の病や障害、穢れなどは、神との結びつきを断絶する「罪」であると律法に規定され、それを共通認識にしていた。ここに差別感が生じ、対象者を非人間化・非共同体化に追いやる。悪霊は人間を非人間化させる働き。すなわち悪霊とは、外部に浮遊する霊力というより、人間内部に存在する不可知な力ではないだろうか。

興味深いことに、大悪霊が小悪霊を追い出すこともあるらしい(ルカ 11:15)。だがそれは、ますます神から切り離され、状態を悪化させることに他ならない(11:26)。イエスは悪霊を追い出し、言葉を奪われていた者に語らせ(11:14)、墓場に隔離されていた者を家に帰した(8:39)。イエスが為す癒しは、あらゆる圧迫からの解放。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ(11:20)」。人は、神の国に迎え入れられるよう、「神の指」で解き放たれる。

「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの(詩編 8:4)」。悪霊を追い出し、その人の姿を回復させる「神の指」は、父なる神の創造。あるいは悪霊に踏みにじられて「無価値にされた私」の再創造と呼ぼうか。「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなののでしょうか。人の子は何ものなののでしょうか。あなたが顧みてくださるとは(85)」。「人間は、人の子は」と傍で語っているようだが、詩人は己の事としての驚愕しているのだ。神が星辰の創造者であることには頷けるが(8:4)、そんな壮大な方が「無価値にされた私」を顧みて下さることには驚かざるを得ない(8:5)。イエスの業は、そうした「神の指」そのものなのである(ルカ 11:20)。

頑張りや努力の積み重ねで、私たちはある程度まで強くなれるだろう(11:21)。しかし悪霊は、どんなに修練した人間よりも強い(11:22)。詩人が感激したように、「神の指」としてのイエスは、悪霊に苦しめられる者を見逃さない。「神の指」でその人を見つけ、解き放ち、神の国に迎え入れる(11:20)。

悪霊は、神の律法を使いこなしたように、私たちの信仰をも使いこなす。だから常に注意深くあれ。



【おまけのひとつ】

宇宙を創った神の指 途方もなさすぎて分かるまい 同じ指の創造が 世の片隅で起こっている
彼の人か 此の人か いや私かもしれない 悪霊に引き裂かれた者を 神の指が再び創造している